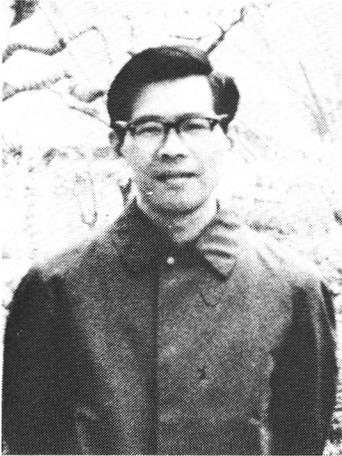


## 恵さん 追悼

早稲田大学教授 滝口 宏



恵さんがどこかへ行ってしまった、ということは、どう考えても信じられない。ひょっと現われて、持ち前の半分うれしそうな半分困ったような顔をして、千葉の話しや古墳のことなどしてくれるのではないかな、と思ったりする。それほど恵さんは身近な人だ。

銀座の真ん中で生まれ育ったのに、下町のオッチョコチョイな気風は全く見られなかった。真面目そのものだった。工科系に進むつもりだったのが、ふとしたことから私のところに来てしまった。研究室で、同じように物静かな高田久子さんと逢い、やがて一緒になった。二人とも年度は違うが私に卒論を出した。

家庭生活は、二人の性格からみても堅実そのものであったろう。ただ夫人の身体が弱かったので、その分を恵さんがかばっていた。一緒になった直後、共立女子大の渡辺健治教授（西洋美術史）にあずけた。ここでも良くつとめてくれた。

やがて、千葉の文化財行政に多くの負担がかかるようになり、機構改革を行なうというので、恵さんに行って貰うことにした。いま考えると、それが、私の大切な若い友人の二人を相ついで失う遠因でもあった。

昨年の10月16日、一粒だねの勉君を残して久子夫人が他界した。恵さんのときと同じように、告別の日は小雨にけむっていた。夫人は板碑の力作を卒論でまとめた。それをもう一度手がけたいというので、恵さんが持って帰ったが、それも果せなくなった。

県の方針で、恵さんたちが都市公社に移されたとき、はじめ私は疑問を感じたが、公社は良く遇して呉れた。恵さんは気持ち良くそこで活躍した。短かい一生の中で一番幸福なときであったろう。古墳研究を中心にしていたし、仲間もそこをテーマにする者が多かったので、研究は進んだ。

「皆で古墳研究の雑誌を出したいので、原稿持って来ました」と、ある正月に集まった

とき話して呉れた。頼もしいグループである。やがてその雑誌もうぶ声をあげた。

昨日（3月16日）文化庁の会議に出た四件のうち二つが恵さん関係のものであった。胸のつまる思いだった。遺物の一つ一つに恵さんの慎重なおももちがうつっているように思えた。

3月1日、突然の訃報に、お忙しい中を千葉からも多くのかたがたが集まって下さった。翌日の葬儀もそうであった。有難い次第である。市毛君はじめ、若い人たちが立ち働いてくれた。

もうこんな不幸のないように。恵さんを送りながら、恵さんと同じ学問の道を歩くこの人たちに、いつもしあわせのあるように、と心に願った。それが恵さんの一番の願っていたことであつたろうと思っている。

昭和52年3月

# 中村恵次君を悼む

千葉県教育委員会

教育長 今井 正

本県文化財調査等の事業で死の3日前まで職務を遂行され、元気に働いていた(財)千葉県文化財センター調査部長(兼)研究部長(県教育庁主査)故中村恵次君に謹んで捧げます。

君は早稲田大学大学院文学研究科で史学を専攻し、修士となり、共立女子大学においてその専門分野について教鞭をとり、生涯の研究テーマである「日本古代史の諸問題」にとりくみ、特に房総の古墳研究を通じて東国における古墳発生の歴史的意義、解明に当っておりました。

その研究は早く、滝口宏教授門下の逸材として学界で認めるところであり、若くして日本考古学協会会員に推挙され将来を嘱望されておりました。

さて、本県の7～8年前と言えば、各種開発の目ざましい進展の頃で、反面、文化財保護行政において最も困難性の多いときで、対応策の判断に苦しんでいるときでありました。従って、君の知識・能力を本県では是非必要とし、恩師、先輩ともおはかりし、慚く本教育庁文化課に迎えたのであります。

一度千葉の文化財を開発等から守らなければと決意した君は、その使命感と意気込みにより東京の新築したばかりの自宅を処分し、千葉の住人となり全力投球で与えられた業務に黙々と励み、文化財行政の円滑な流れをつくり、市町村関係者等内外の人々から高い評価を寄せられたのであります。

その業績は教育庁文化課は申すまでもなく、開発庁(企業庁)、都市公社、文化財センターと君の赴くところの全てに及んでおります。即ち文化課においては、新東京国際空港、成田ニュータウン、千葉ニュータウン等の計画や日本住宅公団、日本道路公団等の行う各種事業計画に伴う遺跡の取扱いについて、それぞれ十分協議検討し、遺漏のない適切な処理がなされたのであります。また、加曾利貝塚、大覚寺山古墳、姉崎天神山古墳等、数多くの遺跡や芝山古墳群の出土品について極力、国又は県の指定文化財としての指定に尽力し、更に重要遺跡の選定を強く訴えたのも君であります。

文化財センター等に出向しては、文化課の機能をおおいに助けつつ、職務としての関

係遺跡の学術調査に情熱をかたむけ、調査員を激励し、調査作業員から親しまれ、よく地域文化の充実に寄与してきたのであります。

特に文化財センターの設立に際しては、最高幹部職員の一人としてよく上司を助け、礼厚くおごらず一段と精励され、同センターの事業もようやく軌道に乗り、その発展にはめざましいものがあつたのであります。しかるに君は、昨年10月18日、君の最大の理解者である御夫人を病のため失われました。この誠に悲しい出来事にもかかわらず、君は職場で悲痛なものを見せず、粉骨砕身その職に徹され、その信念と責任感に私は心を強く打たれたのであります。

ところで、時あたかも文化財センターは新年度の事業計画をかかえて規模、内容等も一段と充実し、関係者の期待が大きく寄せられているとき、真に突如として君は、この3月1日早朝病魔のおとずれるところとなり、御母上、御子息、近親者等の見守る中で同日午後2時20分、久子夫人のもとへ赴かれました。

これからの君の手腕にまつところ多く、全幅の信頼をもっていた私はまことに遺憾のきわみでございます。

わずか5ヶ月足らずのうちにご両親をなくされた遺児 勉君をはじめ、御親族の皆様方の御胸中察するに余りありますが、私どもも今は御冥福を祈るばかりであります。

君が本県に残した文化財の保護や史学に対する情熱は仕事と研究に執拗なまでの問題意識をもって臨んできた態度は、同僚や後輩等により末長く引継がれて行くことだと思います。

よく本県の文化財行政担当者であり、また、すぐれた考古学者であつた中村恵次君、安らかに御永眠ください。

昭和52年3月

# 中村調査部長の逝去を悼む

財団法人 千葉県文化財センター

常務理事 植 松 震

昭和52年3月1日突然訪れた思いもよらぬ訃報に接し、私は事の意外さに思わず茫然として、なすすべもなく表現しきれない衝撃を受けました。

昨年10月最愛の久子夫人に先立たれ、子息勉君の成長をひたすら願いながらの日々を送っておられた君が、なぜ此の様な事に成ってしまったのか、生者必滅とか、人生朝露のごとしとか申しますが、人生のはかなさをこれ程までに痛切に味あわされたことはありません。

中村恵次氏は、昭和45年4月乞われて共立女子大学教務主任から千葉県教育委員会文化財主事として迎えられ、千葉県の文化財保護行政に携わられました。この時が氏と私との第一回の出合でありました。その後、昭和47年4月進展する開発に対処するため、(財)千葉県都市公社に派遣され埋蔵文化財の発掘調査に従事され、昭和49年11月(財)千葉県文化財センター設立と同時に当財団の調査部長を兼務していただく事になり、これが私との第二の出合でありました。昭和50年4月からは、(財)千葉県都市公社から当財団に派遣替えとなり、以来研究部長の職を兼ねながらよくその重責に耐えながら調査研究員の指導・育成を図り、当財団の要として情熱を持って職務を遂行しその職責を果してこられました。

当財団に籍を置かれてからも寧日ない有様で、研究事業を初め、指揮をとられた調査は、千葉市東寺山第一古墳群(戸張作遺跡)を皮切りに、東寺山石神遺跡、中野僧御堂遺跡、生浜古墳群、木戸作貝塚、成田新東京国際空港、荒屋敷貝塚等、その他当財団の事業総てについてその手腕、力量を発揮され、財団の運営に心血を注いでこられました。

また、中村恵次氏はまれに見る温厚、篤実なお人柄で万人に愛され終始笑顔を絶さず部下の信望厚く、多くの人から親まれ財団にとりましてもかけがえの無い方でありました。

氏は、考古学協会員としてもその中核をなす人物として評価され、特に古墳に関する造詣が深く、滝口教授を代表とする古墳時代研究会の一員として活躍され、その学識の深さと綿密な観察力は高く期待されるものがありました。

このような中村恵次君を私は片腕とも頼み、何の不安もなく過して来た日を振り返り、今だに氏の急逝を信ずることができません。今にも隣室から常務と声を掛けられるのではないかと。どうか安らかな眠りにつかれ、永遠のやすらぎを祈るばかりです。

昭和52年3月

# 序 文

文化財の重要性については県民各位に広く認識いただいているところでありますが、特に埋蔵文化財の保護は、首都圏にあり、開発の著しい本県にとって緊急かつ重要な課題であります。そのような状況に対応し、本県における埋蔵文化財の調査、研究及び県民の文化財保護思想の涵養と普及を図り、あわせて地域文化の充実に寄与することを目的として財団法人千葉県文化財センターが昭和49年11月に設立されました。このセンターは、県教育委員会から派遣された専門職員等により運営され、当面国・県等の公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しており、その活躍は全国的に注目されているところであります。

このたび、従来の考古学資料に最近の発掘調査活動により得た資料を加えた総合的な資料の分析・研究がなされ、前年に引き継ぎ、研究紀要の第2冊「考古学から見た房総文化の解明―2、縄文時代」が刊行されたことは、まことによろこばしいことであります。特に、県内の資料を中心に分析、検討を加え、縄文時代の集落、石器、土器論が展開されており、学術資料として高く評価されるものと確信しております。

終りに、研究紀要の刊行を慶祝するとともに、現場での発掘調査のかたわら、研究に専念された調査研究員及び関係者各位に厚く御礼申し上げます。

昭和52年3月

千葉県教育委員会

教育長 今 井 正

## 刊行のことば

財団千葉県文化財センター設立の目的は、県内における埋蔵文化財の調査・研究及び県民の文化財保護思想の涵養と普及を図るとともに、開発と環境整備の調和を図り県民生活の向上と、地域文化の充実に寄与することを目的として、千葉県が全額出資して設立された財団法人であります。

目的に記したように当財団の事業は、調査と研究が二本の柱として運営され、研究事業にも大きなウエイトを掛けるべく努力いたしております。しかしながら現時点においては人的構成その他の障害もあり思うにまかせぬ処であります。職員一同力を合せて研究事業に取り組んでいる次第であります。

昭和50年度においては、財団千葉県文化財センター研究事業の一環として、千葉県教育委員会の委託を受け、研究紀要「考古学から見た房総文化の解明」の主題のもとに「先土器時代」を刊行し、考古学関係諸氏の御披見を得た処であります。昭和51年度も引続き第2年次として、当財団が独自に同主題のもとに「縄文時代」をテーマとして、本県を中心にした同時代の考察をまとめ、ここに発刊を見る運びとなりました。

本県の埋蔵文化財は全国一の宝庫と言われ、縄文時代の遺跡も数千か所と推定されている地域であります。本年は、明治10年エドワード・シルヴェスター・モースによる東京都太田区山王1丁目所在の大森貝塚調査から満100年を経過し、考古学にとって一つの記念すべき年に当たっております。この様な時に「縄文時代」を課題として取り上げましたことは、誠に意義あることと考えております。

縄文時代は、数千年に及ぶ長い年月であり、全期間を捉える事は紙面その他の制約が有り心ならずも本書においては、縄文中期を主として、3つの観点から記述したものであります。すなわち、同時代の生活様式として考えられる狩猟、漁撈、採集と社会構成を知る上からの住の問題が有りますが、一つは、遺物の内縄文式土器に観点を当て、多種多様な文様から考察を加え、土器の変遷を当財団で昭和50年度に調査を実施した千葉市中野僧御堂遺跡出土の土器を基準に比較検討してまとめ、一つは、遺物の内生産用具としての石器を取り上げて、その組成を近県の出土石器と対比し、地域的様相を究明しようとしたものであります。最後に生活の本拠である住居、すなわち集落の立地とそのあり方について記述し、まとめとしたものであります。

終りに、本書が多くの学究諸氏の眼にふれ御批判を得ることができれば、当財団にとりまして此の上ない喜びであります。

昭和52年3月

財団法人 千葉県文化財センター

常務理事 植 松 震

# 目 次

第 1 篇	縄文時代集落の成立と展開 ——国分谷周辺区域における前期、中期を中心として—— 清 藤 一 順 …………… 1
第 2 篇	関東地方における縄文時代中期末の土器群 折 原 繁 …………… 37
第 3 篇	房総における縄文中期末の石器群について 種 田 齊 吾 …………… 63
付 篇	故 中村恵次氏 略年譜 …………… 82
	同 業績目録 …………… 83

## 編 集 後 記

千葉県文化財センターは調査部、研究部、庶務課よりなるが、本紀要は研究部の研究事業の成果の一つである。故 中村恵次氏は調査部長としての激務のかたわら研究部長も兼任されていたが、本センターの特色の一つとして研究部の育成には特に大きな力を注がれていた。

研究部の事業内容は、埋蔵文化財研究の企画、遺跡の調査方法及び出土遺物の保存処理方法等の研究、情報資料の収集・整理・提供、文化財保護思想の涵養・普及等である。しかし現実には部長職のみならず研究部職員（50年度3名、51年度5名）は調査部兼務であり、短期間の研究日を除いては発掘調査に忙殺され、研究部としての仕事は勤務時間外の労働である。

それでも、いつかは独立した研究部を育てようと部長の抱負は大きかった。埋蔵文化財の保護・調査・普及、特に調査においては学問的な裏付けのある優れた認識があつてこそ、はじめて質が高く、かつ効率的なものになりうるという確信を持ち続けていた。それは極めて当然のことながら、我々はともすれば行政という枠組に流されて閉鎖的、惰性的になり易くこの基本的な精神を他の理由で糊塗しがちである。部長は現在の埋蔵文化財の置かれている立場を踏まえながら一步一步着実な前進をめざしていた。調査員会議の設置、講演を含む研修会の実行、発掘調査方法の交流、広報用小冊子の刊行、広報及び学術用映画撮影の準備、鉄器保存処理・土壌分析等関連諸科学のセンター独自の採用等々。

研究紀要の発行は特に多大な努力を惜しまなかった。行政における発掘調査報告書は時間的に限定され完全に咀嚼された報告を刊行することは殆んど不可能に近い。各報告書で言及できなかったことを中心に問題点を洗い直して批判を乞い、それを糧にさらに調査員の質を高め、しいては調査方法に反映する。部長はとりあえず5ヶ年計画をもくろみ、初年度は先土器、2年目である今年は縄文時代に進んだ。縄文時代は3人の研究部職員がそれぞれの分野から縄文中期という限定された時期を選定し、一つの目標に向って歩んだ。十分なる条件のもとで書かれたものではなく、その内容は必ずしも満足できるものではない。しかしそこには今後の可能性が秘められている。

その部長も今は逝い。せわしくすうタバコの煙でくすんでいた部長室の机の上には、女子職員の手による大好物のコーヒーが寂しく置かれている。

(S 生)

# 故中村恵次氏略年譜及び業績目録

## 略年譜

- 昭和7年3月4日 東京都中央区銀座東2丁目2番地に生まれる
- 昭和14年4月 東京都中央区立京橋小学校入学
- 昭和19年4月 東京都立工芸学校入学
- 昭和22年4月 東京都立工芸高等学校機械工芸科編入学  
山岳部にて活躍、特待生として授業料免除
- 昭和25年3月 東京都立工芸高等学校機械工芸科卒業
- 昭和26年4月 早稲田大学教育学部社会科地理歴史専攻入学
- 昭和32年3月 早稲田大学教育学部社会科地理歴史専攻卒業  
卒業論文「我国における古代国家の誕生」 主査 滝口 宏教授
- 昭和32年4月 早稲田大学大学院文学研究科特殊学生となる（以後、早大考古学研究室において考古学研究及び学生の指導に当る）
- 昭和34年4月 早稲田大学大学院文学研究科史学専攻修士課程入学  
西岡研究室所属
- 昭和36年3月 早稲田大学大学院文学研究科史学専修修士課程修了  
修士論文「古代陸奥鎮守府の史的研究—奈良・平安初期に於ける辺境経路—」 主査 西岡 虎之助教授
- 昭和36年4月 東京国立博物館臨時職員
- 昭和36年10月29日 高田忠作氏長女久子さんと富士川欽二先生夫妻の媒酌により結婚
- 昭和36年2月1日 共立女子大学学生課勤務
- 昭和38年6月15日 長男 勉君 誕生
- 昭和40年5月 日本考古学協会員となる
- 昭和41年4月 日本私立大学連盟学生厚生補導研究会常任幹事（任期2ヶ年）となる
- 昭和44年4月 共立女子大学学生課主任となる
- 昭和45年3月 共立女子大学学生課退職
- 昭和45年4月 千葉県教育庁文化課勤務。文化財主事を経て、文化課文化財調査班長となり、開発と文化財保護の調整にあたる。
- 昭和48年4月 千葉県開発庁へ出向し、千葉県都市公社へ派遣。  
千葉県都市公社文化財調査事務所調査課長となり、埋蔵文化財の調査を指導。

- 昭和50年4月 千葉県教育庁文化課主査から、千葉県文化財センターへ派遣。調査部長となる。
- 昭和50年11月 千葉県文化財センター研究部長兼任となる。
- 昭和51年4月 立正大学文学部非常勤講師（考古学特論担当）
- 昭和51年10月18日 最愛の久子夫人を膠原病の一種エリテマトーデス病のため失う（午前2時37分）
- 昭和52年3月1日 脳卒中のため死去（午後2時20分）

## 業 績 目 録

- 昭和34年 1月 西戸山遺跡調査報告（共著）『古代』31号 早大考古学会
- 6月 歴史の学としての認識について—考古学を中心にしての提起—『金鈴』9・10合併号 早大考古学研究会
- 9月 千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査（共著）『古代』33号 早大考古学会
- 昭和35年 3月 千葉県東葛飾郡印旛村油作古墳群（共著）『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査（第一次）』 千葉県教育委員会
- 4月 ラルフ・リントンの進化説について『金鈴』11号 早大考古学研究会
- 7月 石垣島山原遺跡『沖繩 八重山』 校倉書房
- 9月 『西岡虎之助蔵 莊園関係絵図展観目録並解説』に分担執筆 早大図書館
- 昭和36年 3月 四条前住居址・沼南村北作II号墳（共著）『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査（本編）』 千葉県教育委員会
- 12月 千葉市中原古墳群調査報告（共著）『古代』37号 早大考古学会
- 昭和37年 12月 下総に於ける後期古墳—特に群集墳の分布とその問題点— 『民衆史研究』 創刊号 民衆史研究会
- 昭和38年 4月 （共同発表） 南総町江子田瓢箪塚古墳の調査 日本考古学協会38年度大会
- 6月 千葉県芝山町山田古墳群調査報告 『金鈴』17号 早大考古学研究会
- 昭和39年 3月 千葉県養老川流域の古墳群についての一考察 『古代』42・43合併号 早大考古学会

- 昭和39年 4月 上総土気舟塚古墳の調査（共同発表） 日本考古学協会39年度大会  
9月 千葉県における後期古墳 —とくに群集墳の分布・内部施設・被葬者について— 『金鈴』 18号 早大考古学研究会
- 昭和40年 3月 千葉県松戸市千駄堀遺跡 『千葉県遺跡調査報告書』 千葉県教育委員会  
4月 竜角寺古墳群97号墳の発掘調査（共同発表） 日本考古学協会40年度大会  
7月 現代女子学生の就職観寸描 —世代論的にみた意識の類型—（発表）  
『学生厚生補導研究会夏季合宿研修会報告』 私大連学生厚生補導研究会
- 昭和41年 3月 富津町稲荷塚古墳（共著） 『千葉県遺跡調査報告書』 千葉県教育委員会  
4月 上総・下総の接壤地帯における後期古墳の問題 『考古学ジャーナル』  
2号 ニューサイエンス社
- 昭和42年 3月 発生期古墳の地域相 —南囲— 『歴史教育』 3月号  
3月 千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査 『古代』 48号 早大考古学会  
3月 『市原市文化財調査報告書 第3冊 —市原市周辺地域の調査—』（編著）  
市原市教育委員会
- 10月 富津古墳群八丁塚古墳調査報告 『古代』 49・50合併号 早大考古学会  
昭和43年 3月 『南大広遺跡 海保古墳群 —市原市埋蔵文化財調査報告 第4冊—』  
（編著） 市原市教育委員会  
3月 『千葉県木更津市清見台古墳群発掘調査報告』（編著） 清見台発掘調  
査団
- 3月 千葉県市原市富士見塚古墳 『日本考古学年報』 16号 誠文堂新光社  
5月 『日本古代史の諸問題』（共著） 福村出版
- 昭和44年 3月 千葉県山武郡土気町舟塚古墳 『日本考古学年報』 17 誠文堂新光社
- 昭和46年 3月 千葉県市原市福増古墳群・千葉県市原市荻作古墳群1号墳 『日本考古学  
年報』 19 誠文堂新光社
- 昭和47年 3月 『湯坂遺跡調査概報』（編著） 千葉県教育委員会  
6月 『古墳時代研究 I —千葉県市原市小田部古墳の調査—』（監修） 古  
墳時代研究会
- 9月 房総半島における横穴式石室について 『房総文化』 第12号
- 昭和48年 3月 前方後方墳の一考察 —千葉県市原市六孫王原古墳の調査—（共著）  
『古代』 55号 早大考古学会  
3月 湯坂遺跡 『日本考古学年報』 24 日本考古学協会
- 昭和49年 2月 『市原市大厩遺跡』（監修） 千葉県都市公社・千葉県開発公社  
2月 房総の装飾古墳 『考古学ジャーナル』 91号 ニューサイエンス社

- 昭和49年 2月 柏市鴻ノ巣遺跡〔監修〕 日本住宅公団首都圏宅地開発本部・財団法人  
千葉県都市公社
- 3月 『市原市菊間遺跡』（監修） 千葉県都市公社
- 3月 『千葉市荒屋敷貝塚』（監修） 千葉県都市公社
- 3月 木更津市請西遺跡群 ―予備調査概報―〔監修〕
- 4月 房総半島における横穴式石室 ―とくに複室構造の石室について―  
『史館』第2号 市川ジャーナル
- 12月 房総半島における変形石室 ―L字形・T字形石室とその周辺―  
『史館』第4号 市川ジャーナル
- 昭和50年 2月 『八千代市村上遺跡群』（監修） 千葉県都市公社
- 3月 浅間山1号墳発掘調査報告書〔監修〕 浅間山1号墳発掘調査団
- 5月 『古墳時代研究Ⅱ ―千葉県市原市六孫王原古墳の調査―』（監修）  
古墳時代研究会
- 8月 日吉倉遺跡特論（共著）『遺跡日吉倉 ―千葉県印旛郡富里村日吉倉遺  
跡調査報告書』 日吉倉遺跡調査団
- 9月 『阿玉台北遺跡』（監修） 千葉県都市公社・千葉県土地開発公社
- 昭和51年 3月 『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』（監修） 千葉県文化財センター
- 3月 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 V 〔監修〕 千葉県企業庁・  
千葉県文化財センター
- 4月 西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』上に分担執筆 東京堂出版
- 5月 東寺山戸張作古墳群『日本考古学年報』27 日本考古学協会
- 8月 『佐倉城址』 〔監修〕 千葉県文化財センター
- 9月 『千葉市荒屋敷貝塚 ―貝塚外縁部遺構確認調査報告―』 千葉県文化  
財センター
- 10月 房総の横穴式石室雑考『千葉県立上総博物館報』第26号 千葉県立上総博  
物館
- 昭和52年 4月 西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』下に分担執筆 東京堂出版
- 4月 房総半島における変形石室（Ⅱ） ―小見川町城山六号墳石室を中心と  
して―（未定稿）『史館』第8号 市川ジャーナル

未刊のもの

- 昭和52年 3月 「東寺山古墳群」 道路公団東京第1建設局・千葉県文化財センター
- 3月 「千葉市中野僧御堂遺跡」 道路公団東京第1建設局・千葉県文化財センター
- 3月 「東寺山石神遺跡」
- 3月 「東寺山戸張作遺跡」 道路公団東京第1建設局・千葉県文化財センター

中村氏の略年譜及び業績目録は、日本考古学協会・早稲田大学教育学部・早稲田大学大学院文学研究科・共立女子大学学生部・千葉県教育庁文化課の各機関の協力をえた。厚く謝意を表す。

研 究 紀 要 2

考古学から見た房総文化の解明

2 縄 文 時 代

印 刷 昭 和 52 年 3 月 20 日

発 行 昭 和 52 年 3 月 31 日

編集・発行 財団法人 千葉県文化財センター

〒280 千葉市亥鼻 1-3-13

電話 (0472) 27-2293

印 刷 所 株式会社 弘 文 社